

もっと知りたい！ 大腿骨近位部骨折



執筆：渡部欣忍（帝京大学医学部整形外科学講座教授／同附属病院外傷センターセンター長）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。

▶HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶登録手続

Introduction p1

1. 超高齢社会の到来と骨折治療のパラダイムシフト p4

2. 大腿骨近位部骨折（hip fracture）とは p5

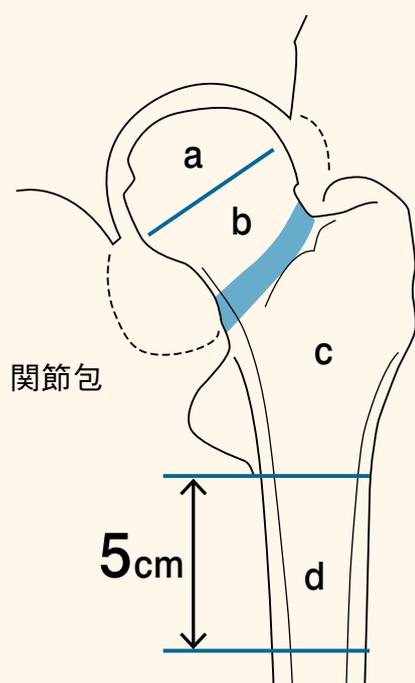
3. 大腿骨近位部骨折の診断 p6

4. 大腿骨近位部骨折の分類と治療 p9

5. 大腿骨頸部骨折の分類と治療 p10

6. 大腿骨転子部骨折の分類と治療 p17

7. 生命予後・機能予後，リエゾンサービス p26



▶HTML 版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

Introduction

1. 超高齢社会の到来と骨折治療のパラダイムシフト

- ①「平成」は、整形外傷の軸足が若・壮年者の重度四肢外傷から高齢者の脆弱性骨折へと急速にパラダイムシフトした時代
- ②高齢化率：65歳以上の高齢者人口/総人口(%)
1945(昭和20)年5%未満(終戦直後)
1970(昭和45)年7%：高齢化社会
1994(平成6)年14%：高齢社会
2007(平成19)年21%：超高齢社会
- ③労働災害・交通事故が減少，脆弱性骨折が増加

2. 大腿骨近位部骨折(hip fracture)とは

- ①大腿骨近位部骨折≡大腿骨頸部/転子部骨折
- ②脆弱性骨折：立った位置からの転倒程度の低エネルギー損傷で生じる骨折

3. 大腿骨近位部骨折の診断

- ①典型的な病歴：高齢者，転倒，臀部痛，起立不能，介護骨折
- ②典型的な身体所見：スカルパ三角の圧痛，他動的股関節痛
- ③画像検査：両股関節正面像+軸位像，不顕性骨折(occult fracture)がある。
- ④不顕性骨折の診断：MRIとCT

4. 大腿骨近位部骨折の分類と治療

- ①生命予後・機能予後ともに保存療法より手術療法がよい

②わが国では、大腿骨近位部骨折の95%以上に対して手術療法を選択

5. 大腿骨頸部骨折の分類と治療

①非転位型と転位型の2群分類

②内固定術後の局所合併症：偽関節，骨頭壊死，遅発性骨頭圧潰など

③非転位型：整復内固定術が第一選択，cannulated screw，pin，SHSなど

④転位型：人工骨頭置換術が第一選択，暦年齢・身体年齢が若ければ人工股関節全置換術（THA）を行う場合もある

6. 大腿骨転子部骨折の分類と治療

①AO/OTA包括分類

②整復内固定術が第一選択

③固定材料としては，髓内釘かSHS

④治療失敗＝整復喪失&ラグスクリューのカットアウト

⑤整復位とラグスクリューの至適位置：内反股は不可。ラグスクリューは，center-centerでTAD 25mm以下をめざす

7. 生命予後・機能予後，リエゾンサービス

①わが国では，術後1年での死亡率は10%前後。欧米の約半分

②生命予後：男性，高齢，受傷前の低い歩行能力，認知症，長期入院，心疾患，BMI低値があると悪い

③受傷から手術までの期間：欧米では48時間以内の手術が常識。わが国では，平均4.1日（2018年）

④機能予後：受傷前に屋外歩行自立していた患者の移動能力維持率は約50%

⑤急性期病院，回復期リハビリテーション病院，施設・自宅をつなぐ地域

連携パスは有用

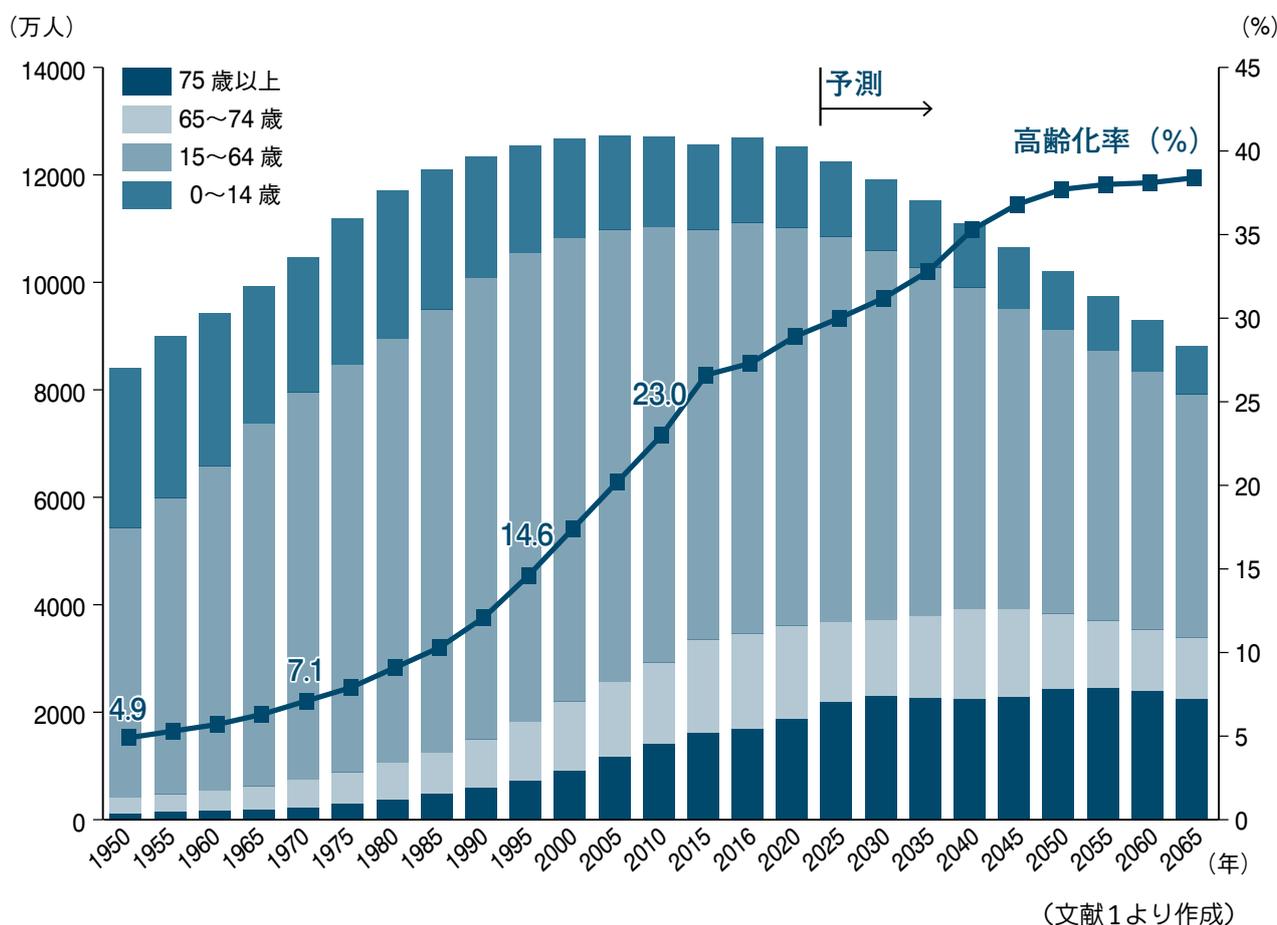
1. 超高齢社会の到来と骨折治療のパラダイムシフト

「平成」は、整形外傷の軸足が若・壮年者の重度四肢外傷から高齢者の脆弱性骨折へと急速にパラダイムシフトした時代であった。

65歳以上の高齢者人口(老年人口)が総人口に占める割合を高齢化率と呼ぶ。終戦直後のわが国の高齢化率は5%未満であった。

「昭和」は、戦後の復興・高度成長期と自動車社会の到来が重なり、労働災害や交通事故による比較的重度の四肢外傷・骨折をいかに治療するかが、整形外科医や外傷医にとって重要な時代であった。その間に、わが国の高齢化は密かに進行し、1970(昭和45)年に高齢化率は7%を超え「高齢化社会」が到来していたが¹⁾、まだ大きな社会問題としてはとらえられていなかった。その後もわが国の高齢化は進行し、高齢化率は1994(平成6)年に14%を超えて「高齢社会」、2007(平成19)年に21%を超え「超高齢社会」が世界に先駆けて到来した(図1)¹⁾。

図1 わが国の高齢化率の変化



労働災害防止政策、道路および交通の改善を目的とした道路行政、そして自動車の安全性能の改善により、労災事故や交通事故による重度四肢外傷は著しく減少した。一方、超高齢社会の到来により、骨粗鬆症を背景とした脆弱性骨折の発生数は顕著に増加していった。整形外傷の主軸が、労災事故・交通事故による若・壮年者の重度外傷から高齢者の脆弱性骨折へと変化していった時代が平成であったと言える。

諸外国と同様にわが国においても、2012(平成24)年頃をピークに大腿骨近位部骨折の発生率は減少傾向にあると推測されている²⁾。しかし、高齢者人口が増加しているため、大腿骨近位部骨折の発生数そのものはさらに増加し、新規骨折発生数は25~30万例/年程度まで増加すると予想されている³⁾⁴⁾。

2. 大腿骨近位部骨折 (hip fracture) とは

股関節近くの大腿骨骨折を大腿骨近位部骨折と呼ぶ。「整形外科学用語集」では、大腿骨近位部骨折に対応する英語は、hip fractureとなっている⁵⁾。hip fractureを直訳すれば、「股の骨折」「股関節骨折」になる。元は専門用語ではなかったのだが、骨粗鬆症を背景とする脆弱性骨折としての大腿骨頸部骨折、大腿骨転子部骨折を中心に、英語論文では古くからhip fractureという用語はよく用いられてきた。大腿骨近位部骨折もhip fractureも骨頭骨折や転子下骨折を含んでいるので、大腿骨近位部骨折とhip fractureは同義である。

大腿骨近位部骨折には、大腿骨の骨頭骨折、頸部骨折、転子部骨折、転子下骨折の4つが含まれる(図2)⁶⁾⁷⁾。かつては、大腿骨近位部骨折は、骨頭骨折、骨頭下骨折、頸部骨折、中間部骨折、頸基部骨折、転子間骨折、転子貫通骨折、転子下骨折などに分類されていた。骨頭下骨折は、狭義の頸部骨折よりも近位に骨折線があるのだが、この両者はどちらに分類されるかよりも転位の程度のほうが予後に影響するので、区別する意味がほと